

## 映画「母と暮せば」をみて

原爆を搭載したB29のコックピットの映像が流れるシーンから始まる。この映画は、戦争や病気で家族を失って一人になった「母」の元へ、原爆で亡くなった次男・浩二の亡霊がやってくる、という物語だ。話題作でもあり、皆さんの関心が高く、たくさんの方が参加され会場を埋め尽くした。

舞台は昭和20年（1945年）とその3年後の長崎。昭和20年の8月9日は長崎に原爆が投下された日。浩二の父も兄もすでに他界しており、二人で暮らす浩二と母・伸子だが、その浩二も8月9日の原爆で一瞬にして、消えてしまった。せめて、服の切れ端でもあればと、証拠を探す伸子だが、3年経っても何も



見つからず、ついに「息子は間違はなく死んだのだ」と諦める。

しかし諦めた途端、浩二が家に戻ってくるようになった。ただしこの浩二は亡霊。亡霊の浩二はそれからちよくちよく伸子のもとを訪ね、楽しくも悲しい生活が始まる。

浩二がふつと現れて伸子と思い出話をしたと思ったら、寂しくなるとスーッと消えてしまう。そしてまたひよっこり現れる。現れた浩二を見つめるたびに「浩二、来ていたのね」とパーッと笑顔になる。息子を愛する母の笑顔である。

浩二には将来、結婚を考える恋人がいた。町子である。素朴で、清楚で、優しい町子は、浩二が死んで一人になった伸子を訪ね、家の手伝いをしながら伸子を支えている。

しかし、浩二が死んで3年。伸子は、町子も浩二を忘れ、他の人と結婚して幸せになるべきだと考えるようになる。伸子は、浩二に「町子ちゃんに好きな人ができたら、おまえは諦めないかんよ。お前はこの世の人じゃないんだから」と話す。この言葉を聞いた浩二は、血相を変えて「いやだ」と拒絶する。伸子は町子にも、その気

持ちを伝えるが、町子も「浩二を忘れるなんてことはできない。このまま独身でいい」と同じように拒絶する。この状況はなんとも言葉にできない。

自分の好きな人が、同じように自分を大切に思ってくれている。それが、自分が死んだことで、もう同じ将来は叶わない。浩二は町子を幸せにできないと頭では分かっているが、それを心と記憶が許してくれないのだ。

浩二はそのうち伸子の訴えに納得をする。しかし、町子は頑固に浩二への思いを貫くが、少しずつ伸子が自分のためにそう言っているのだと感じ始めた。町子はいかに同僚の男性と結婚することになる。町子が伸子の家に結婚相手を連れてきた。二人に遺影の前に座ってもらった。伸子が「浩二、この人はね、町子の……」といったまま声を詰まらせて嗚咽する。私は、伸子と浩二に謝る町子を見て「なんて辛いのだろう、そしてなんて三人とも優しいのだろう」と涙がこみ上げてきた。浩二は、自分では町子を幸せにできないと苦しみを感じながら、町子の幸せを願う。町子は、自分自身の浩二への思いや伸子への裏切りだと苦しむ。しかし伸子の思いやりを汲む。伸子は、息子を愛する人が息子を忘れることに苦しみ、しかし町子の幸せを願う。長崎の原爆という悲しい設定の中で生まれる人と人との優しさと思

やり、そして葛藤の中からの選択。人が生きるといふことは、こんなにも優しく悲しいものだということ。を、穏やかな映像でしっかり伝えてくれる映画でした。

人権機関有田川 上田 玲子

### 人権映画会アンケートから

2月17日（日）、金屋文化保健センターで開催した人権映画会「母と暮せば」に参加された皆さまからいただいた感想を一部紹介します。

生と死について、改めて考えさせられる思いです。若くして亡くなった息子もつらいし、残された母もとてもつらかったことでしょう。二度と戦争は起こってほしくないと思つづく思いました。

50代女性

戦争の悲惨さ、親子の家族愛など、大変すばらしい映画でした。平和で人々の人権が尊重される社会を築けるよう一丸となればと思う。本日はありがとうございました。

50代男性

### ■人権に関する問い合わせ

有田川町教育委員会 社会教育課

TEL 52212111  
FAX 3214827